

ジョジョの奇妙な冒険
私が承太郎ポジと
かマジかよ！？

Pyromane

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「あれ？ 私死んだはずじゃ……あれ？ この人見たことあるんだけど？ え、ホリイさん？
まさかジヨジヨの世界に転生しちゃつたの!?」

これはジヨジヨファンの女性が立ち読みならぬ歩き読みをしていて道交法を違反し
た結果死んでしまったがなぜかジヨジヨの世界に転生した物語である。なぜかジヨ
ジヨになるわしかも承太郎（自分）が女だわ極めつけにプラチ奈もいるし……もうわ
かんねえな

この作品は、作者の思い付き35%、皆様のコメント20%、原作崩壊15%、主人
公の葛藤15%、主人公のチート十無双10%、その他5%の予定でお送りしてい
ます

作者から皆様へ評価やコメントに対して一言

コメントや評価をしてくださる方、大変嬉しいのですがコメントについては設定について文句を言わることはおやめください。どうしてもしたい場合は自分で好きに作品をお書きください。そうすれば設定を作ることの難しさやSSを書くことの難しさがわかると思います。

評価についてですが高評価する場合でも低評価をつける場合でもそうなのですが一言コメントを付け加えていただきたい。例えばここが面白い！とかここが設定矛盾しているし面白くないよ、みたいな感じで構いません

あらすじに関係のない事もお書きしたこと、誠に謝罪申し上げるとともに最後の注意点を

先に申し上げました通りこの作品は主人公に憑依転生+TS+駄文な上にオリ主が無双します。「ただし転生者はパンピーなので途中から敵（とはいえ人）を殺すことに葛藤を抱き始めます」

以上のこと踏まえたうえ、仕方ねえから読んでいいてやるよーと心の広いお方、ゆっくりしていいってね！

そしてジョジョでのチートが嫌いな方はすぐにブウラウザバツクし読まないことをお勧めいたします。

目 次

第0話 プロローグ							1
第1話 とりあえず状況の確認と記憶 の確認をしないとな							8
第2話 修行の中1から3年の回想 とジョセフへの確認とSPW財団への頼 みごとく中3							
第3話 邂逅、そして・・・							
第4話 花京院襲来							
第5話 法皇の縁							
第6話 修行、説明、旅立ち							
第6・5話 仲間になつたスタンド使い たちについての説明 + α	70	58	48	40	30	18	

第7話 タワーオブグレー				
第8話 ダークブルームーン				
第9話 ストレングス(1)				
第10話 ストレングス(2)				
106	97	90	79	

第0話 プロローグ

私、夢宮桜はジョジョファンだ。同じジョジョファンは友人にもいる。姉弟たちもジョジョファンだ、だが私たちの好きなキャラや好きな部、好きなスタンドは全く違う。友人の沢岐康平は第6部、好きなキャラはエンポリオ、そして好きなスタンドはウエザー・リポート

弟は第4部、好きなキャラは岸部露伴、好きなスタンドはレッド・ホット・チリペッパー

姉は第5部、兄貴ことプロシユート、好きなスタンドはクレイジー・ダイヤモンド
そして私は第2部、ルドル・フォン・シユトロハイム、そして好きなスタンドはスター・プラチナだ。

私は第2部のジョセフとワムウの駆け引きやシユトロハイムの傲慢なようで愛国心に満ち溢れた心などが好きなのだ。

そしてスター・プラチナはかつこいい、その一言に尽くるがそれだけでは表せない魅力があるのだ。

まずスター・プラチナを発現した承太郎についてだが、今でいうマザコンに近いと認識

されがちな気もするが、歴代のジョジョを思い返してみると、自分に近しい（親しい）人間に對してはあんな感じだと思う。

「・・・という意見を聞いてあんたたちはどう思う？」

「そーだな。姉ちゃんの言いたいことはわかつたけど」

「ええ、私は歴代ジョジョは友人たちに甘いとは思うけど」

「俺は桜の意見についてはわからんでもないが」

『やつぱり一番好きなものは変わらんな』

「・・・チツ」

まあ、分かりきってたことだしいいか。

そんなことよりジョジョリオンの新刊が出るのって今日か、買いに行かなきやな！

（○△書店にて）

「ジョジョリオンの最新刊はチツと♪」

「多分この辺にあるはず・・・あつた！しかも最後の1巻だ！あつぶな！！

「すいませ～ん」

「は～い、お会計ですね？」

「そうです～」

「え～、消費税込みで421円になります」

「じゃあこれで」

「501円のお預かりになります。お釣りの80円とレシートになります」

「ありがとうございます～」

「またのお越しを～」

「いや～いい買い物したな～♪」

　そうしてジョジョリオンの最新刊を買った私はテンションが上がり過ぎていたのか
もしかないと10分後になつて思う。

「今回も荒木先生は楽しませてくれるな～！」

私は、ジョジョリオンの11巻を読みながら家に戻っていた。
そのためだつた。私がそれに気付けなかつたのは。

「あんた！あぶない!!」

「え？」

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

というかなりのスピードで走つていた車が急ブレーキを踏んで停止しようとしたよう
な音が聞こえてくるのと

顔を上げた時にその車が自分の目の前に迫つてくるのを知覚するのはほぼ同時だつ
た。

(さすがにこの状況では避けられないな・・・できれば第8部の最終回を読みたかつた
なあ)

ドンッ!!

そうして私は自分の死を自覚した。そして何より気を失うまでに願つたことは一つだつた。

(スタートラチナを実際に見てみたかつたなあ・・・)

そう願うと同時に私の生は幕を閉じた・・・・・

「生まれてきてくれてありがとう！」

はずだつた。

死んだはずなのに目を覚ますというのはおかしいと思うのだが覚ましてしまつたも

のはしようがないと言えるだろう。

そして一番驚いているのは今私をやさしく抱き上げている女性に見覚えがあつたのだ。

「あなたの名前は空条淨華、私の娘よ！」

「そう！旧姓ホリイ・ジョースター、空条聖子として日本で暮らしている空条ホリイだつたのだ。

「おぎやああああああああああああああ！おぎやああああああああああああ！（スター・プラチナとかのスタンダードが見たいと死ぬ直前に願つたからなのかな？）」

「よしよし……泣かないで？私のかわいい淨華ちゃん」

この人の声を聞いてると安心するんだよな……赤ちゃんになつちやつたこともあるんだろう、眠たくなつてきちゃつた。ある程度の年齢になつたらおじいちゃんであるジヨセフ・ジヨースターに連絡を取つてみるか。

7 第0話 プロローグ

それじやあおやすみ
・
Z
Z
Z

第1話　　とりあえず状況の確認と記憶の確認をしないとな

とりあえず6歳になつたわけですが。

え？お前は誰かつて？ヤダなあ、私ですよ私。転生者であり承太郎に転生しちやつた

空条淨華ですよ。

「淨華ちゃん」

「はい」

現世のお母さん、空条ホリイに呼ばれてしまつたな。

お母さんは3歳くらいから少し難しいような言葉や、独り言をよくつぶやき、家族のみんなを除いた人たちに気味悪がられていた私にも優しくしてくれた。アニメや漫画で知つてたけど心優しき少年、空条承太郎の母であることがよくわかつた。

「淨華ちゃん、お買い物に行きましょ？」

「わかったー」

まあどんなに難しい言葉を言つてもおおよそ子供口調で文字にするとひらがなになるんだけどね・・・。

（母娘買い物中）

今日の夕飯の買い物と明日の朝ごはんの買い物だつたらしい。

今日の夕飯の方のメインはこの時代ではかなりごちそうになるハンバーグだ。他はポテトサラダや目玉焼きも作るのだろう。

ついでというかなんというか・・・お母さんに服も見繕われた。それも現代でいうところのゴスロリと甘口リの中間みたいなのだつた・・・。

「今日あつたことを振り返つてたわけだけどここが私の知つてるジョジョの世界かもわからないんだよなあ・・・。もしかしたらジョジョの原作によく似た世界かもしれない

し

そう、『私がＴＳ承太郎として転生した』という以外にもそう思つてしまふ『出来事』があつたのだ。

「まさかうろジョジョに出てくるプラチ奈が4歳くらいの時に発現しちやうとは・・・」

そうなのだ、ジョジョの奇妙な冒險の正史（漫画やアニメをみて誰かが作つた年表とか自分が見直してた時に憶えた物）では承太郎がスタンド、『スター・プラチナ』を発現するのは17歳の8月あたりだつたはずなんだよね・・・。

それに『スター・プラチナ』ではなく『プラチ奈』を発現してしまつた。

「まあ、『プラチ奈』とも多少会話ができたからスタンドがどういうものか、というのがわかつただけいいとするか」

『発現当初にはスタンドの自我がある』というようなことを花京院が言つていたのを思い出した。そのため『プラチ奈』が発現してしまつて、特に熱も（平熱より高くなつた

（くらいで）でなかつたため、YES／NOで聞こうとしたのだが、第5部の登場人物であるトリツシユ・ウナのスタンンドである『スパイス・ガール』や、同じく第5部の登場人物であるグイード・ミスターのスタンンドである『セツクス・ピストルズ』、第7部の登場人物であるポコロコのスタンンド『ヘイ・ヤー』のように自我があり、多少の会話ができるのだ。

そのため、スタンンドとは何なのかや、レクイエム化、『プラチナ』には何ができるのかなどを聞いた。

それぞれの質問とそれに対する答えはこんな感じだった。

『『ぶらちな』、あなたたちスタンドつていつたいなんなの？』

『私たちはあなたたちの精神の具現化したビジョンのようなものだけどその実、そうではないわ』

『どういうこと？』

『簡単に言うと私たちは普通の人間には見ることのできないエネルギーの塊のような物よ』

『それで？』

『エネルギーの塊であるがゆえにエネルギーの放出や受け渡しができるスタンンドもある

の』

つまりレクイエム化も無理やり発動させることができるつてことかな?』

『その通りよ』

「せいしんてきにはつながつて いるのね・・・でもいきなり考 えてたことに対す る答 えを 言わ れるとおどろい ちやうから 次から はしないよ うにしてね?」

『わかつたわ』

『とい うのがス トア ンドとは?』に 対する 答えだつた。ただ レクイエム化についてのこと も出たためそのままそれに対す る質問も し ま うことにした。

『ではれくいえむ化は あなたたちス トア ンドにどう い う えいきよ うを与えるの?』

『レクイエム化、とい うのは あなたたちの概 念であつて 私たちス トア ンドからすればむしろ逆だわ』

『ぎやく?』

『そ うよ、私た ちス トア ンドは精神のエネルギーを 使つてビジヨンになつて いる、とい うのは理 解して るのよ ね?』

「ええ」

『人の精神のエネルギーは限られているわ、だから力や能力の強いスタンドはそのスタンドの所持者のそばからほどんど離れられないのよ』

「つまりどういうこと?』

『射程距離、というものを知つていてるでしよう?』

「ええ、じどうついびがたみたいなスタンド以外はきほんてきにしやていきよりがあるのよね? れいがいとしてせかい全体にこうかを及ぼすのうりよくのスタンドもいるけど』

『その通りよ、そしてそれは間違いではないけど正確なわけでもないの』

「つまりしやていきよりとスタンドのうりよく、そしてスタンドがビジョンとして見るためのせいしんエネルギーにかんけいがあるのね?』

『そうよ。射程距離とスタンドそのものの能力、スタンドの特殊能力には密接な関係があるわ』

強力な能力や特殊能力を持つスタンドほど射程距離が短くなるということね。

つまり力や精密動作性、成長性なんかが低いものほど遠くへ行けるってことかな?

でも成長性が低いのがスタンドのパワーとか精密動作性がそのスタンドの成長限界

に近づいたからだとすればその場合はどうなるのかしら？

『スタンドの特殊能力が強力すぎる場合とパワーなんかが強力すぎる場合は射程距離が短くなつていくわ。

逆にパワーや特殊能力なんかがほとんどないようなスタンドだと射程距離はどんどん遠くなつていくわ』

「なるほど・・・」

そして最後の『プラチ奈』には何ができるか？という質問になつた。・・・が、その前に気になつていたことを聞いた。

『それで、わたしが知つてゐる『げんさく』の『スター・プラチナ』はおとこなんだけど・・・』
『たぶんそれはあなたが女だからだと思うわ』

『つまりてんせいしたけつかわたしが女のせいしんせいをもつていたからつてこと？』
『おそらくは。そうでなければあなたの知る世界と全く違う世界、もしくは限りなく近いけど細部の異なる世界ね』

「そう・・・。中学生くらいになつてからおじいちゃんが来た時にでも今までにあつたこ

とを教えてもらおうかな』

『そうね、それがいいと思うわ』

「それで『プラチ奈』、あなたの能力ってなんなの?」

『私の能力は『解析』と『逆転』よ』

『『かいせき』は何となくわかるんだけど『ぎやくてん』って?』
『私の能力の『ぎやくてん』はベクトルの反転と言い換えてもいい』

ベクトル反転・・・ロリコン・・・うつ頭が。

まあ、ふざけるのはやめにしてベクトル反転ってことは攻撃を跳ね返すこともできるってことかな?』

『私の『逆転』で操れないモノは基本的にないわ』

「つまりはんてんできないものもあるってことね?』

『そうよ、私が反転できないのは生物の心。ただそれだけよ』

『こうげきなんかはふつうにはねかえせるのよね?』

『ええ。攻撃に限らず他のスタンドの能力も反転できるわ』

嫁入り前の女の子だものね。いくら傷の治りが早いと言つても刺し傷とか切り傷なんか作りたくないわ。

…………と、まあこんな感じだった。

これつて『プラチナ』と『スター・プラチナ』の能力一緒に使えれば敵に怪我とかさせられても問題なく治せそうね。

『スター・プラチナ』の能力は行き過ぎた加速による時間の停止（承太郎自身が加速し過ぎたため時間が止まつたように感じる）だから加速の方向を反転させれば怪我とか気にしなくてもよさそうなのよね……。

あ、それと『解析』についてはFateの衛宮士郎なんかが使つてる『解析』と同じ感じだつたわね。

私の記憶のジョジョの正史についてプラチナにメモしてもらつてつと。今日も精密動作性を上げるための練習しなきや！

17 第1話 とりあえず状況の確認と記憶の確認をしないとな

それじゃあ画面の向こうの人たち！さよなら!!

第2話 修行～中1から3年～の回想とジョセフへの確認とSPW財団への頼みごと～中3～

『プラチ奈』が初めて出てきたときから少しづつ修行をしていた私だが・・・やつぱり中学生になつたし心機一転して『プラチ奈』が自我を持つてゐるのもあり自分自身を鍛えようと思つた。

そう思つた時に私はなぜか『プラチ奈』とスパーリング（というよりガチバトル？）をすれば強くなれるんじやないか？とか思つてたよ。

普通に走りこみとかして体力をつけるとか、腹筋背筋とかをしつかりするとかスクワットをするとか色々あつただろうに・・・

「ほんと・・・厨二病つて怖いなあ・・・」

そう、修行をしていた時期で一番精神的に高ぶっていたのだ。・・・中学2年生の前後あたりで。

うん、あれは怖いわ。だつていくら原作の『スター・プラチナ』と比べてパワーが（中

2の時だが）2段階くらい劣っていた（おおよそCくらい）。だからと言っても破壊力がBに近い『プラチナ』と本気で殴りあうとかいうこと——かすり傷とか軽い打撲だけしかなかつたから多分手加減してくれてたのだろうが私はテンションが上がりすぎててそんなことにすら気づけなかつた————が初めに思い浮かんだのだろうか？

『あのときは本当に驚いたわよ？それまで普通に走りこみとか腹筋とかを地道にやつたのにいきなり私と本気で戦つてみたいだなんて言つてきて。それにあの時私が本気で殴つてたら最悪あなたが死んでたわよ？運が良くて重傷を負つて再起不能だつたわ』

「うん、あれは忘れて頂戴。私もできるだけ早く忘れないのよ。ただでさえ厨二病とかいう黒歴史ができたのよ？」

『ちゃんと反省してるわね？』

「安心してよ。私だって馬鹿じやないのよ？あのころはどうしても変なテンションが続いちやうのよ」

『はあ・・・まあ、いいわ。生身で敵のスタンドと戦わなきやいけないってことになつたら何があつても逃げるのよ？』

「わかつてゐるつて。さすがに遠慮も何もしない敵のスタンドと戦う気なんてないわよ」

そう、できるだけではなく絶対に大怪我をしたくないのだ。

厨二病を罹患していた時期に一度だけ受け方とかが悪くて岩板（プロリード）が出てきた映画？でベジータがラリアットを食らつて押し付けられたようなやつ）に背中からぶつかつて骨が折れたことがあつた。

幸い、腕の骨だつたが、少し骨が突き出していた。だが家に帰らないとSPW財団にも連絡が取れないとそのまま帰つた。・・・それがいけなかつた。ホリイお母さんに見つかつてしまつたのだ。

「淨華ちゃん！大丈夫なの・・・!?ほ、骨が・・・皮膚の外に出てる？これつて折れてない!?SPW財団日本支部のの医療チームに連絡を・・・!!」

「落ち着いて、お母さん。怪我はしてるけどそんなに慌てることはないわ。痛いのは痛いけどね？」

「そ、そ、う、ね、早くSPW財団の医療チームに連絡をして治療してもらわなきやね」

「うん、おじいちゃんにも一応連絡を取りたいんだけど・・・」

「わかつたわ。でも医療チームが来るまでに最低限の応急処置はするわよ」

うん、そこからお母さんは迅速な処置で私の怪我の応急処置とSPW財団への連絡、おじいちゃんへの連絡（日本に来てほしいというもの）を5分で終わらせるほどだった。それほど心配させてしまつたのだ。さらにおじいちゃんが来てからは酷かつた。

「ホリイ！ 浄華は大丈夫なのか!?」

「うん、大丈夫よパパ。怪我をして帰ってきたときには驚いたけど1日でほとんど日常生活に支障がないくらいに回復したわ」

「骨が皮膚から突き出すほどの怪我をしていたのにか？」

「ええ、私も不思議だつたんだけどパパも結構大きい怪我でも1日くらい出直つてたし普通なのかなつて思つてるの」

「そ、そうじやな・・・。それはそうと浄華がワシのことを呼びよせてほしいと言つたと
いうのは本当か？」

「うん、浄華ちゃんになんでか聞いてみたら『おじいちゃんと話がしたいの』って言つて
たわ」

（なぜじや？ 浄華とはたまに電話で話したり、1年に1度は会いに来ているのに今回は大きな怪我をしたと言つてもワシをわざわざ呼び寄せる必要はないはずじやろ・・・？）

私は謝しがつておじいちゃんを見ながらどうするべきか悩んでいた。

おじいちゃんは一人娘のお母さんと孫娘の私に年に一度は最低でも会いに来てくれるのだ。

なので私が会いたいこともほとんどなかつた。大怪我をしたという理由もこじつけだつた。怪我をしてしまつたという事実を利用したのだ。

そんなことを考えているとおじいちゃんが目の前に来ていた。

「それで淨華。ワシに聞きたいことはなんじゃ? S P W財団の人間たちも呼んでワシの後に話ををするという話じやあないか」

「うん、おじいちゃんに聞きたいことがあつてお母さんに呼んでもらつたのよ。聞きたいことはおじいちゃんとおじいちゃんのおじいちゃん、ジョナサン・ジョースターのことについてよ」

「なに?」

「だから私がききたいのはおじいちゃんたち自身がしてきたことだつて言つてるの」

「ワシらのしてきたことじやと?」

「ええ、できるだけ詳しく、正確に、嘘偽りなく教えてほしいの」

「あ、ああ。それは構わんが・・・」

それから私はおじいちゃんに聞き続けた。

ジョナサンがしたこと、DIOとジョナサンの話、おじいちゃんがやつてきたこと、柱の男やシーザーの話、そしてエリザベス達やシユトロハイムのことについて教えてくれた。

「それでワシからも聞きたいことがあるんじゃがいいか？」

「うん、私の聞かれると思つてのことだと思うからいいよ」

「なぜ淨華（私）が柱の男やDIOについて知つているんじゃ？（のかでしょ）？」

正直これは絶対に聞かれると思つてた。

誤魔化すか正直に言うか迷うところではある、有耶無耶にするという選択肢もあるがおじいちゃんから聞いた限りでは私の知つている第1部と第2部の話だった。

つまりこれから先も第6部あたりまでは私が何もしなければ私の知つている未来と同じ、もしくはそれに限りなく近いことが起きるだろう。

「私が今から言うことは本当のこと、そしてかなり高い確率で起ころる未来。嘘を言つて
るかどうかの判断はおじいちゃんに任せるとわ」

「う、うむ」

「まず私は私が知る世界では『男のはずだった』のよ」

「何？それはどういうことじや？」

「私が仏教なんかでいう転生、ああ、転生と言つても輪廻転生じゃないわ。死んでほかの
世界の他人なんかに転生するっていう考え方をしてもらえると助かるわ」

「それとこれとどう関係があるんじや？」

「私がこの世界以外の世界から転生したということが重要なのよ」

「つまりどういうことじや？」

「私が聞いたこともない過去の話を正確に知つてているということに疑問を抱いたのよね
？」

「そうじや、DIOやワシの爺さんであるジョナサン、そしてシーザーやスピードワゴン
の爺さん、さらには柱の男のことまですべて知つてているとは思わんかった」

「私はこの世界で起こつたこと、そしてこれから起こることを知つてゐるわ。この世界が
マンガやアニメになつてた世界から転生したのよ。そして私はその作品のファンだつ
たわ」

「淨華……頭は大丈夫か？なんならSPW財団の医療チームもいるから頭も見てもらうか？」

「私としてはそれでもいいけど至極眞面目に言つてるのよ？財団の人にも話しておきた
いこと、そして依頼したいことがあるの」

「一応……今お前が言つたことがすべて本当のことだとしよう。それとワシを呼び寄せ、
さらにはSPW財団に依頼することとはいつたいなんじや？」

「DIOはまだ生きてるわ。おじいちゃんのおばあちゃん、つまりエリナ・ジョースター
が爆発した船から脱出するときに使つた棺桶に入つてたのよ。あの棺桶は2重底に
なつていて下にDIOがジョナサンの体を奪い取つたDIOが入つていたわ。その棺
桶は後3年の内に引き上げられる」

「何!?」

「そしておじいちゃんはDIOと出会い命からがら逃げてきたエジプトの占い師、モハ
メド・アヴドゥルと出会う。私が知つてている未来通りになればそうなるわ」

「ううむ……」

「それ以上に大事なことがあるわ」

「大事なこと……じゃと？」

「そう、何より大事なこと。私が一番回避したいことが。ホリイお母さんがDIOの復

活の影響で私が高校3年の12月に高熱で倒れるわ」

「なんじやと!! もう一度言つてみろ!! ホリイが！ ワシの愛しい一人娘が高熱で倒れるじやと!!」

「これは私が知る未来の通りになつた場合の話。もしもDIOが入つた棺桶が引き上げられなかつたり、DIOが私の知る、おじいちゃんも得る能力を得られなかつたときやそれに至らなければお母さんが倒れることはないわ」

「ワシも得る・・・じやと?」

「ええ、DIOの首から下、つまりジョナサンの体とリンクしているから得るのよ。それも自分の意志とは関係なしに。私たちジョースターの血統はDIOの呪縛に打ち勝たなきやいけないの。お母さんは自分が戦うということができない、精神的には強いけどそれも我慢してるだけかもしれない。しかもDIOを殺さなければお母さんはその高熱のせいで死んでしまうわ。私はそれをどうしても避けたい！ 未来を知つているからこそ今からできることをすべてやっておきたい!!」

「・・・わかつた、お前の知る通りになればワシもお前が本当のことを言つていたということを信じよう。じやがこれだけは忘れるんじやあないぞ。お前がどのようにして生まれ、どう思い生きていくようと関係ない。お前はワシのたつた1人の孫娘じや。そして何よりお前は優しい、その優しさはお前のお母さんであるホリイから受け継いでいると

「ということを、決して忘れるんじゃないぞ」

「うん・・・わかつたわ。決して忘れないしこれ以降はできるだけ怪我もしないようするわ。お母さんに心配なんてかけたくないもの」

「うむ、分かればいい」

そういうつてジョセフ^{私の}・ジョースターはニカツと笑いながら部屋を出た。

それと入れ替わるように入ってきたSPW財団の経理担当や、諜報部の人たちとの話し合いを始めた。

「それじゃあ、経理の人に聞きたいためがあるんですがよろしいでしようか？」

「ええ、問題ないですよ」

「じゃあ、遠慮なく。DIOが目覚めるとわかっているのが1983年のことです、私はそれ以上のことわからぬ。そこで経理の人には、1983年以後にカイロで価値に合わないお金が動いた邸宅なんかを調べてほしいんです」

「なるほど、分かりました。それ以外に頼まれたいことなどはありませんか？」

「今のところは大丈夫です・・・あつ、諜報部と経理の人を動かすのに必要になるお金とかの代償として私は私の知る情報を伝えますのでまた後で連絡を下さい」

「わかりました」

カイロにDIOが根を張ることがわかつてゐるんだから、そこを突かなくちやいけない。DIOは狡猾であると同時にものすごく頭のいい男だ。動きすぎると『原作』より早くに仕掛けてくるかもしない。だからこそ慎重にならなければならない。

「諜報部の人には、花京院典明、ジャン・ピエール・ポルナレフの両名ができるだけ監視しておいてほしいんです」

「なぜですか？」

「1984年以降のことなんですけど1986年の7月までにDIOがその2人にDIOが接触します。だから、その前にこの二人を私のところへ連れてきてほしいんです」

その言葉にこの場にいるすべての人間が戦慄した。

スピードワゴンにDIOのしてきたことを聞いている人や吸血鬼や柱の男を見たことがある人ばかりだつたのだろう。

それからDIOのするであろうことやディアボロのことなどについても調査してもらうよう頼んだ。

「わかりました。他にやつてほしいことはありますか？」

「ポルナレフの妹が殺されていてポルナレフが旅をしていればポルナレフを連れてくるときにはあなたの妹を殺した人間を知っていると伝えてくれますか」

「ええ、大丈夫です」

こうして相談と依頼が終わつた。

私がもう少し早くポルナレフとシェリーちゃんのことを思いついて……いや、どう

にかしようとしていればシェリーちゃんは生きていただろう。

わかつていたのにそれをしなかつた私の責任だ。

まずはポルナレフに会つたらそれを謝ろう。

第3話 邂逅、そして・・・

私が高校2年生になつたあたりでSPW財団から

「貴女の言つていた男の一人、ジャン・ピエール・ポルナレフを見つけました!!」

という連絡が入つた。

初めに、何という朗報だろう!と思つた。続いて出てきた感情は罪悪感、そして深い後悔の念だつた。

ポルナレフを見つける前に財団の諜報部の人たちは私が言つていたフランスの片田舎という情報だけで、フランス中を駆け回つてくれていたらしい。

ありがたく思うと同時に申し訳なくも思つた。記憶にない情報は出すことすらできないとはいえる多くの人やお金が動いただろ。私の知つてることでこの世界でもほぼ確実に起こるであろうこと（株価の上下、さらに言うと確実に出資したら儲かるというところの情報や人気の便利アイテム）を渡しておいた。

有効活用してくれると助かる・・・あんなお金、おじいちゃんに出してもらわなきや

払えないけど、こんなことでおじいちゃんにお金を使わせたくもなかつた。

第4部主人公である、東方仗助はすでにおじいちゃんにこさえられているのだ。

それを考えるとおじいちゃんには賠償金がわりの遺産配分を仗助たちにしつかりしてもらわなきや困る。

まあ、それは私が考えることでもないか。

GWの時期を見計らつてポルナレフとの会談場所を用意してくれたSPW財団には感謝するしかないな。

今学生なんだよな。私つて・・・。昔というか前世も高校生をしたことあつたから今まで基本的にテストなんかでは10位くらいには入つていたけど高校3年の就職なんかで大事な時期に学校を無断で2週間くらい休むことになるからなあ・・・。その時はおじいちゃんの仕事について詳しく知るために仕事についていくつて言い訳しとかないとな・・・。

ポルナレフが来た時には嬉しいより申し訳ないという気持ちが大きかつた。
だからこそ彼には謝りたいと思つた。

「ポルナレフ・・・！本当にごめんなさい！！」

「お前が淨華つてやつでいいんだな？なぜ謝る？」

「だつて・・・あなたの妹、シェリーちゃんが殺されることを知っていたのに何も教えてあげられなかつた!!あなたに会えてうれしいより何もできなかつた自分が悔しくなつた！何よりもあなたに謝りたかつた！」

そう言つて私は頭を思い切り下げた。そんな私にポルナレフは優しい声で

「お前が謝ることはない。妹を守れなかつたのは俺の力が足りなかつたからだ」と、慰めてくれた。

嘘をつくのはうまいけど裏表のほとんどない彼の言葉に涙腺が完全に崩壊してしまつた。

それとほぼ同時におじいちゃんが乱入してきてポルナレフに掴み掛ろうとしたがそれは私が制した。

「ありがとう、ポルナレフ。なんか泣いてあなたに気にしないと許されて気が楽になつ

たよ」

「本当に氣にすることはない、妹を守れなかつたのは俺自身のせいだ。そして俺がお前を嫌つたりお前に対しても敵意を向ける気はない。それをしてるとすれば妹を殺した犯人だけだ」

「そうね、私は犯人の風貌、スタンド能力も知つてゐるわ。でも、今のあなたには教えてあげられない。本当にごめんなさい」

「なぜだ！俺はそいつさえ殺すことができれば死んでもいいんだ!!なぜ知つているのに教えてくれない！」

ポルナレフが私の言つたことに怒氣を隠さず掴み掛つてきた。

シェリーちゃんの仇の名前や風貌、スタンド能力まで知つていてるのにそれをまだ教えられないと言つて隠匿しようとしていることに怒つたのだろう。

でも、私は絶対に教えることはできない、なぜなら・・・・

『淨華に手を上げることは許さないわ』

「そこよ」

「はあ！」

「だからあなたが『死んでもいい』と、自分の命などどうでもいいって思っているうちは教えることができないと言つてゐるのよ」

「俺はシェリーの仇を打つために旅をしていたんだ！そのために仇と相打ちにならうとも本望だ！！」

パンツ!!!

「な、何しやがる!!」

「何つて、あなたにビンタしたのよ。わからぬいかしら？なんで私がこんなことをしたか」

「ああ、分からねえな！あつてすぐの女に殴られるほどのことを見た覚えはねえからなあ！！」

「私は言つたわ、あなたが命を失つてもいいと思つてゐるうちは教えられないと。私はあなたが死んでしまうと悲しいし悔しい」

「なんだ？俺とお前は会つたばかりだろう。なぜおまえが悲しむ？」

「私の話を信じてくれるかどうかはあなたに任せせるわ。あなたが信じなくとも私は気にしない。でも、眞実は変わらない」

そうして私はおじいちゃんにした話とほぼ同じ、でも過去ではなく少し未来の話をした。

「・・・お前の話を信じるかどうかはお前にについて行つて決める、今言つた話と同じ、もしくはそれに近いことが起きれば信じてやるよ」

「ありがとう。でも私が知つてゐるあなたの話は悲劇的に終わるわ。だからあなたには死を覚悟するのではなく生きて生を謳歌してほしいのよ。そして何より幸福を感じてほしい」

「ああ、死に急ぐ気はねえ。チャリオ^{戦車}ツツもお前にはバレてるみてえだしな。」

「ええ、あなたのスタンド能力、『シルバー・チャリオツツ』のことは知つてるわ。それどころか敵になるであろう人間たちのスタンドも知つている」

「お前には情報に関しては絶対に勝てる気がしねえや。普通なら俺のことをも知るはずがないのにあの有名なSPW財団に俺を調べさせて呼び寄せるとはな。それ以上にスタンド戦でも勝てる気がしねえ。スタンド能力が完全に知られた状態ではどう戦つても勝てる気がしねえ」

「あなたがスタンド能力や剣技の鍛錬を始めたのはいつからなの?私のいた世界でマン

ガに描かれてたあなたは10年間鍛錬をしていたって言つていたんだけど計算が合わないのよ。貴方が生まれつきのスタンド使いだということは知つてるわ、あなたはスタンドのせいで体調を崩した時期とか今から3年以上前から修行してた理由は?」

「チャリオツツのことによくわからなかつた時期があつた、だから意思疎通ができるかどうか試したことあつた。チャリオツツの見た目から剣術なんかの修行もしたことある。チャリオツツ自体の修行は制御できるまでに3年はかかつた。自在に扱えるようになるまでにはさらに2年かかつた。自在に扱えるようになつてからはシェリーのために使うことも多かつた」

「剣術か…だからあなたは剣の達人なのね。シェリーちゃんのために使つていたつていうのは野犬に襲われかけてるときとかに守るために使つてたとか?」

「そうだな、シェリーが襲われてる時に守るために使つたり、10歳くらいまでシェリーをあやすためのおもちゃなんかを作つてたな」

「やっぱすっげえわ。ポルナレフが生まれつきのスタンド使いだつて知つてたし修行してたのも知つてたけど精密動作がそんな頃からできてたとか…。私は4歳くらいの時に『プラチ奈』が発現したけど会話ができなかつたらいまだに精密動作もできなかつたわ。まあ、私に危険が迫れば勝手に出てくることもあるんだけね」

「なんだと?お前のスタンドは会話もできるのか?」

「ええ、完全に自我を持つてるわ」

『淨華、ポルナレフたちに本当のことを教えたのはいいけどいいの？』

「うお！？・・・本当にしやべるんだな・・・」

「だから言つたじやない、信じてもらうためよ。弱点まで知られても私たちには対処法もあるわよ？後ポルナレフ、これで信じてもらえたかしら？」

「あ、ああ。ここまでされたら信じるしかねえよ。俺は戦いで死なねえようにあなたについて行く。戦いもするだろうが絶対に死なねえ。誰も犠牲になんてさせねえ。・・・守りたいものを守り通せない虚無感なんてものを味わうのは俺だけでいい」

そして時は流れ・・・ストーリーは加速する。
幻 作

「キヤー――――!! 淨華様よお―――!!」

「こつちつを向いてええええええええええええええ!!」

「キヤー――――私に目を向けてくれたわああああああああああ!!」

「違うわよ私に向けたのよ!!」

ブチツ!!!

「うつとおいしい!!ちょっと静かにしなさい!!」

キヤー————!!

ジョジョの原作の留置所から出て次の日に学校に向かつた時と似たような状況だった。私は内心動搖もしていた。

(なんで!?この時期にこんな状況に!?確かに承太郎はモテてたんだろうけどさ!!私はそんなにすごいことして無いじやん!それ以上にこのメンツは本当にあの時と同じなんだけど!?しかも2か月くらい前には『スター・プラチナ』も発現しちゃったし!原作から1年も前だよ!?)

そう、原作から1年以上前に物語が始まってしまったのだ。唯一の救いはアヴドウルが原作通りに仲間になつてポルナレフも仲間にできたことだけだつた。
これで花京院が出てきたら完璧にスタートだな・・・。

「・・・・・・・・・・」

第4話 花京院襲来

マズイなあ・・・。

この状況は非常にまずい、何がまずいって原作の承太郎より1年早くて花京院と会う可能性が出てきた。

というかなんで私同性からこんなにキヤーキヤー言われてんの!?女同士だよ!?私はレズじゃないよ!女子に告白されたことあるけどその時にちゃんと同性愛者じやないって言つたんだよ!?

男ども（不良）に絡まれてるのを助けたのがまずかつたか?でもあそこで助けないとそれはそれでまずいことになつたと思うんだよな・・・。

「とりあえずそのキャーキャー言うのやめてよ・・・」

『はあい!!』

これで少しの間多少はましになるだろうけどそれより問題なのはこの先なんだよね・・・。

花京院と会わなければまだ対策を立てる時間が増えないこともないんだけど・・・。

「・・・・・・・・・・・・」

!?今、確かに感じた！スタンド使いとすれ違つた！おそらくDIOの刺客だ。落ちつけ・・・花京院ならば対処の使用はまだある。逆に花京院じやなれば知らないスタンド使いじゃない限り問題はない。

とりあえずスルーだ。もし花京院ならもう少しで原作でやつていた攻撃を仕掛けてくるはずだ。

「そろそろか・・・」

「何がそろそろなの？淨華様」

「なんでもないわ」

そう、もう神社の階段を下りるところまであと5mだ・・・焦ることはない。呼吸を整えて平常心を取り戻せ。

もし怪我をしてもあのマンガの登場人物のようになかつたことにできる怪我をする前に戻せるのだから。

お母さんにばれることも・・・いや。あの女ひとなら私の反応1つで何かあつたことがばれるだろうな・・・。

つと、仕掛けてくるならあと5秒くらいか。逆にこの5秒間で何もしてこなければ花京院じやない可能性が・・・!?

「つ痛う!?」

仕掛けてきたということは花京院でほぼ確定だな。この後ハンカチを渡しに来たらわかるし慌てずに花京院に見えやすいようにスター・プラチナをそして逆にできるだけ見えないようにプラチ奈を出して花京院（仮）の攻撃を受ける前の状態に戻した。まあ、これは裏技の上偶発的に可能だとわかつただけなんだけどね。

まあ順を追つて説明するなら

プラチ奈の能力に『反転』があると判明

←

スター・プラチナの能力は突き詰めれば光速かそれ以上のスピードで動くことにより発生する能力で時間的にはプラス方向（普通の時の流れ）に加速していることになると予想

←

ならプラチ奈の『反転』で逆方向（マイナス方向？）に加速させれば時止めができる時間だけ体の状態なんかを戻せるんじやないかと思いつく

←

試したら成功する

←

それから怪我をするたびその方法をとつてお母さんに特訓なんかでした怪我を隠し

ていた

とまあ、こんな感じだ。

「あれが空条淨華。あのお方のおつしやつていた私に始末してほしい女か。確かに強力なスタンドを所持しているようだ……だが！」

バギヤアツ!!!
(ハイエローファントグリーン)
 花院の無慈悲な一撃がキヤンバスと木の板を襲う

「私の敵ではないな」

何とかほぼ原作通りにできたけど……やれやれだわ……。

『大丈夫ですか?! 淨華様!!』

「ええ、大丈夫よ。ちよつと足を踏み外しただけだから」「よかつた……。あと15cmもずれてたら淨華様のお顔に傷ができるたかもしませんもの」

「この階段は良く事故が起きるんですよ。ですから今度からは私と一緒に・・・」グイツ
!

「抜け駆け禁止協定を忘れたんじゃないでしょうね?」(ボソッ)
「忘れるわけないじやない、だからこの場で言つたのよ。抜け駆けなんて言わせないと
めにね」(ボソッ)

なにか言つてゐるけど別に今回だけで終わるしもう花京院も来たから花京院の方に意
識を向けておくかな。

「君、左足を怪我し・・・ッ!? (なぜだ!?) 確かにハイエローファントの触手で切り裂いたは
ずだ!!なのになぜ怪我をしていないのだ!?いや、『治つてゐる』ならともかく傷の後すら
ないだと!?)」

驚いてるなあ・・・。それじゃあここでさらに爆弾(非物理)を投下して揺さ振りを
かけてみようかな。

「大丈夫よ。心配してくれてありがとうね？花京院君……」

「!?（私の名前を知っているだと……何故だ？このハンカチを開けば予告とともに書いた名前も見えてそこでようやくわかるはずだ。少なくともまだ自己紹介をしてないのだから。しかしそれならばなぜ私の名前を知っているのだ？）」

「おお、長考院になつた。驚いているのにちゃんと考えることができるとは……。

「心配してくれてありがとね？でも階段から落ちただけで怪我なんてしてないから大丈夫よ。あなたは転校生かしら？学校まで案内しましようか？」

「転校生か？という問い合わせに関してはYESです。案内はいいですよ。心配していただかなくともすでに学校までの道のりは覚えていきますので」

「そんなやり取りをして私は花京院と別れた。別れる直前、「あの子……かつこよかつたわね……」「そう？やつぱり淨華様の方がお美しく凜々しいでしょ」という声が聞こえたが、正直全員花京院を好きになつてほしいところだ。困っている人（特に男子に絡まれている女子）を助けていただけなのだ。女子が好きなわけではない。それに花京院が死ぬことになる原因であるDIOのスタンド能力、それを知っているのだ、わざわざ

花京院を殺させたりなどしない。なのでどうか私の追っかけはそろつて花京院の追っかけになつてほしい。

そんなことを考えていると数人の女子が保健室に行きましようと提案してきた。確かに怪我をする前に戻したとはいえ、階段から落ちたのは確かだ。毅然とした態度だが無理をしている、と考えたのだろう。花京院が襲つてくるのは保健室だったので保健室前で追っかけを教室に帰らせて私は保健室に入った。

第5話 法皇の縁

保健室についた私は先客に早く教室に戻りなさいと言い、保健室の外へ行かせた。で
きるだけ巻き込んでしまう人間を減らしたかったのだ。できることならば養護教諭も
他の所へ行かせたかったのだが、怪我をしてないか調べるという名目のためそれができ
なかつた。

「それで淨華ちゃん、今日は何があつたのかしら？」

「神社の境内に続いてる階段の一番上から落ちたんですよ。受け身も取つたし大丈夫
だつて言つたんですけど怪我をしてたら大変だつて連行されて来ました」

「あら、じゃあちゃんと怪我がないか調べないとね！」

「はあ・・・手短にお願いしますね？」

そう言つて触診や服を脱いでの診察（？）を10分ほどで終わらせてもらつた。

私は触診が終わると同時に彼女に異変がないかを注意してみていたが、特に変わつた
様子はなかつた。ただ少し熱っぽい視線を向けてきてやばいかもしけないと思つたこ

とだけは生涯隠しておきたい。

余談ではあるが、先にいた男子生徒たちは教室に帰らせておいた。二次被害を出すと処理なんかも面倒だからだ。

ちなみにこの先生、軽くレズつ氣があるのでできる限り保健室に近づきたくないと思つてゐる女子生徒も多い。（彼女は全く気付いていないが）

「（今はまだ仕掛けでこないつもりかな？仕掛けてきて先生がけがをしたとしても戻せるから最悪どちらでもいいんだけど・・・）」

「淨華ちゃん？ 考え込んじやつて何かあつたのかしら〜？」

「いえ、何もないです。お手数をかけたうえ心配させてしまいすみませんでした」

「いいのよ〜。それが私の仕事なんだから〜」

「では教室に戻りますので。失礼しました」

そう言つて私は保健室を出ようと『した』。そう、『した』のだ。保健室から出ることはできなかつた。なぜならこのタイミングで花京院が仕掛けてきたからだ。

私は内心焦つていた。氣を抜いて先生に背中を向けた瞬間に仕掛けてきたのだ。焦りもする、反応も遅れる。命の取り合いにはしないが相手が殺意を持つて攻撃してくる

のは初めてなのだ。

「花京院君、いるなら出てきなさい。あなたの仕業でしよう？」
「おや、気づかれていましたか。まあいいでしょう」

男子生徒は返しておいたため怪我をすることもなかつた、先生も『ハイエロファントグリーン』に取りつかれているが現時点では怪我もしていない。戦う前に無駄な消耗はしたくない。スタンダードでの戦いは精神面が大きく作用する、原作でも承太郎がツツンした時には本来以上の力を発揮していたのだからこの仮説は間違つていなかろう。スタンダードを出して『いるだけでも精神に負荷がかかる。肉体的疲労と同じように表すならば、全力の8割ほどで1時間走り続けることが10分間スタンダードを出し続けることに匹敵するほどだと』考へてある。なれば疲労は軽減するが。そう考へると天然のスタンダード使いである花京院は私より疲労が小さいだろう。

「それではDIO様のためにも死んでいただきますよ!!」

「フフッ、ご冗談！あなたなんかに私は殺せないわ」

「そこの保険医には私の傀儡となつていただきました。私のスタンダード能力、『ハイエロ

『ファンタントグリーン』の力でね』

「知つてゐるわ。体内に取りついているんでしよう？あなたのスタンンドは小さくなつて相手の体内に入ることもできる中距離戦闘が得意、最大攻撃範囲はおよそ50mつてどこかしら？」

「なぜ知つてゐる？とは言わない。君のスタンンドは未来予知か敵のスタンンド名からどのようなスタンンドかを知ることができると能力を持つた近距離パワー型だろう」

いい感じにかかつてくれてる。DIOに念写されたり盗聴されてる可能性もあるからこういう勘違いをしてくれると楽になるわ。

「さてね、知りたいなら私を倒してからにするのね」ズギュウウウウウウウウウウン
「おや？ いいのかな、私のスタンンドの事を知つてているのなら君がその保険医から無理やり引つ張り出したらどうなるのか知つてるんじゃないのかい？」

「ええ、あなたのスタンンドは先生の体を傷つけながら出てくるんでしょう？ それくらい知つてゐるわ」

まあ、傷つけたところでそれと同時に直すから関係ないんだけどね。『ハイエロファ

ントグリーン』で傷つけているのを確認しているにもかかわらず血が出てないのが不思議なのか花京院が不思議そうな顔をしてるわね。流石に一滴も血が出てないからおかしいと気付くのも早いわね、不思議そうな顔からどんどん表情が変わつて驚愕に歪んでるわwww そういえば花京院の驚いた顔つて新鮮ね。アニメでも原作でもOVAでも驚いた顔なんて見た記憶がないからかしら?

「なぜだ!?なぜハイエロファントが傷つけながら出てきたというのに一切血が出てこないッ!?」

「花京院、あなたは間違いを犯しているのよ。それも重大な間違いを」

「(いつたい何が間違っているんだ? DIO様に従つてることが間違いなわけがない!ならばその他・・・奴のスタンド能力の前提がそもそも間違つてているというのか!)」「あら? その様子だと気付いたようね」

「私の犯した間違いというのは君のスタンド能力に対する誤解だ。君のスタンドは強い力を持ち敵スタンドの能力を知ることのできるものではなく、圧倒的なパワーを持ち傷を治すことのできるスタンドだ」

「フフツ、当たらずとも遠からずよ。まあ、今は敵であるあなたに能力の詳細を教えてあげるほど私は馬鹿でも優しくもないけどね」

そう言つて花京院は『スター・プラチナ』を攻撃して拘束から逃れた。距離を取られたため私は近づかなければ攻撃することはできない。だが私は逆にツ！さらに距離をとつた!!

「なつ!? 逃げるというのか!!!」

「いいえ、この先生を安全などこに移動させるだけよ。あなたが追撃してくるならそれを私のスタンドで迎撃しながら進むだけよ」

学校も無駄に傷つけたくないからついてきてくれるならそれはそれで好都合だけど・・・私はそう思いながら花京院に背を向け保健室から出て、まず職員室に向かつた。

「失礼します！養護教諭の先生が倒れてしまつたので先生方で対処をお願いします!!」

そう言つて私はお姫様抱っこしていた養護教諭の先生を近くにいた女性の先生に渡し、すぐに職員室を出た。

案の定『ハイエロファントグリーン』の触手を伸ばし私を追いかけてきていた。その触手から逃げつつ花京院を人気のないところまで誘導しながら走っていた。

「鬼ごっこはもう終わりかい？なら覚悟を決めたんだね。私のハイエロファントに惨殺される覚悟をッ！」

「いいえ、私はただ逃げてたんじゃないわ。周り、特に対人の被害を出さないようにあなたを人気のないところに誘導していたのよ。これで私も心置きなく戦えるわ」

私がそう言うと同時に花京院はエメラルドスプラッシュを放ってきた。だがそこは中学生のころから『プラチ奈』に鍛えてもらっていた危険察知や動体視力、『スター・プラチナ』のラッシュで難なく躲し、碎いている。私のそういった行動に花京院は驚いてさらに攻撃を単調にさせてている。さらに攻撃が単調になつたことによりいくつかのパターンができている。

パターン1

触手、触脚を伸ばし捕まえて絞め殺そうとする動き

このパターンの場合は回避、迎撃に専念している。わざわざ打つて出て捕まる可能性

を高める必要はないのだから当然の対処だと思う。

パターン2

エメラルドスプラッシュによる中、遠距離攻撃
このパターンでは基本的に花京院も『ハイエローファントグリーン』も動かないためどのように触脚を伸ばし、私を囲み、そしてどのように私に攻撃を仕掛けてくるかを見ている。

罵としてわかり辛いように触脚を伸ばして触れた瞬間にエメラルドスプラッシュを飛ばしてくる・・・うん、これ花京院が死ぬ前とかにやつてたやつだわ。

基本的なパターンはこの2つ、パターンのない適当に見える攻撃もあるから確実とは言えないけど対処は簡単になった。あとは花京院を気絶させて肉の芽を完全に引っこ抜くだけね。

私は縮地を使って50mほど空いていた花京院との距離を一気に30mまで縮めた。一瞬にも満たない時間にそこまで近づいた私に面食らったような表情を見せた花京院

だつたが、すぐにエメラルドスプラッシュで攻撃をしてきた。それを『スター・プラチナ』のラッシュで弾き飛ばし、碎き時々掴んで花京院に向けて投げながら進んでいる。投げた物については『ハイエロファントグリーン』が撃ち落としている。

「な、なぜだ!?なぜトラップをそんなに的確に回避しながら走つて私の方に突っ込んでこられるんだ!?」

「あら、それくらい自分で考えて答えを出しなさいな」

それは彼我の距離が5mまで縮んだ時に交わした言葉だつた。そしてこの距離まで来ると花京院もエメラルドスプラッシュの攻撃を自分の方に飛んでこないよう、だが私にとつてはほぼ全周から撃つてきた。

だがそれすらも躊躇し、花京院の背後につき、絞め落とした。絞め落とすまでにかかるのは2秒、次にこういう機会が来ることがないように祈つていてるけど次にこういうことをしなければならなくなつたときには刹那の時間で絞め落とさなければ、戦い慣れた者が相手だと2、3回は殺されていただろう。戦うことはないだろうけどおじいちゃんとかね。

「つと考え方なんかしてゐる場合じやなかつたわね、肉の芽を抜いて家に連れ帰らないと」

そうして私は肉の芽を完全に除去、家に花京院を連れて帰つた。おじいちゃんやアヴドゥルは心配してくれたが、正直一度も攻撃を食らつてないから花京院の心配をしてあげてほしい。・・・まあ、初対面の上どんな人間かわからないから警戒しているんだろうけど。

まあ、明日には完全に花京院も復活するだらうしその時にでもどうしたいか聞いてみようかな。DIOを倒すのを手伝ってくれるつていうのなら・・・まずはご両親に電話・・・出来なければ一旦おじいちゃんと花京院のご両親に会つてもらつて仕事に興味があるというのでついてきてもらう、といつた感じの事を言つて了承してもらおう。流石に最悪の場合3か月以上離れ離れになるというのに連絡一つなしでは心配されるだろうし。

まあ、どちらにせよ明日だな。

第6話 修行、説明、旅立ち

とりあえず軽く血まみれの花京院を家に連れて帰つたもののSPW財団にも家にも一切連絡を取つてなかつたにもかかわらず誰にも見つからなかつたのは運が良かつたと思う。

そして帰つてきたときに担がれている血まみれの花京院といきなり帰つてきた私に驚いたお母さんの様子を見る限りかなり無茶をしていることがわかる。

「お母さん、最近ちよつと体調が悪いのを無茶してるよね？私も花嫁修業を兼ねて家事を一人でできなきやだめだと思うの。だから今日の家事は私に任せて休んでいて？」

と言つてお母さんにはさりげなく休んでもらつた。実際前世は最低限少ししか家事をしてなかつたのでできる限り炊事だけは、完璧にできるようにしたい。

「おじいちゃん、この人が花京院典明よ。肉の芽も抜いておいたからDIOの手下ではなくなつてゐるし気絶させているから少なくとも今日はうちに泊めておくわ」

「完全に肉の芽を抜いたのか。抜こうとしたものに寄生しようとすることなんじやが……大丈夫だったんじやな？」

「ええ、『スター・プラチナ』の精密動作と圧倒的なパワーで引き抜いてすぐに放り投げて太陽光にあてたわ」

実際寄生しようと伸ばしてきた触手？は『プラチナ』に対処してもらっていたので一切怪我も負つてない。

それに完全に引き抜いた後はすぐに紫外線にあてた。肉の芽はDIOの細胞から作られているのは知っていたのですがすぐに灰になっているのを見て波紋も紫外線のようなものを自分で生成してるのかな？って思つてしまつた。

「それではジョースターさん、この子のことは明日どうするか本人に聞いた後処遇を決めましよう」

「私の考え方としては

1、DIOを倒すのについててくれるといった場合は親に会わせておじいちゃんの仕事を見て社会見学をしたいと口裏を合わせる

2、ついてこないといった場合は普通に家に帰つてもらう

3、帰りたくないと言つたら強制的に連れていく
つて感じね」

「まあ、すでに巻き込まれているとはいえて来たくないと言われたら家に帰してや
るのがいいじゃろうなあ」

花京院の事を（物理的に）落としたとはいえ、気絶させただけなんだから夜にでも起
きると思うからその時に少しだけ話をしておこうと思うけど。

「では昼飯にするとしようかのお」

「そうね、じやあ用意してくるわ。お母さんがかなり無茶してるから私が家事をするこ
とになつてるわ」

「淨華さんの手料理ですか・・・ホリイさんの手料理がとても美味しかったので期待でき
そうですね」

「あまり期待されても困るわ。お母さんに家事がある程度仕込まれてとはいえ手伝い
よりちよつと踏み込んだことをしているつてくらいだから」

そう言つて私は台所に入つた。まずはジャガイモ、ニンジン、タマネギの皮むき、次に豚肉を1口サイズにぶつ切りして軽く臭み取してから少しゆでて次の作業に入つた。醤油やみりん、その他調味料を混ぜた汁でジャガイモをゆでて少し火を通して、次にニンジンを入れた、軽く焦げ目が付くように焼いたタマネギを先に少し茹でておいた肉を入れて3分後くらいに入れた。

ご飯はお母さんが炊いていたようで問題なくあつたため、副菜をつくり始めた。主菜が肉じゃがなので軽く酢の物とサラダを作つて特製ドレッシングとマヨネーズ、どちらでも好きな方をかけられるように付け合わせにしておいた。(ちなみにお母さんには卵粥を先に作つておじいちゃんに持つて行つてもらつた)

私が作つた昼食は大好評であつた。お母さんにはまだ届いてないと思う。もつと頑張らなきやいけないと思つた。

昼食を食べ終わつた後はおじいちゃんに波紋を習つていた。波紋の才能はあるはずなのだ。ジョナサンの息子であるジョージ・ジョースター2世が修行をせずとも(使え

ていたわけではないが）波紋の力を持つていたのだから。

そして何よりストレイツオに引き取られて波紋の修行をしていたエリザベス・ジョースターとジョージ・ジョースターの息子であるおじいちゃんは修行をせずともある程度波紋を使いこなせていたのだから。

「呼吸を意識するのじゃ！ 必要なのは呼吸を乱さないことじゃ!!」

「流石におじいちゃんが受けてた修行の再現ができるわけじやないけどこれはこれでキツツいわね・・・!!」

そう、波紋の修行で今私がやっているのはあのマスクをつけて家の敷地内を走つていた・・・おじいちゃんと一緒に。

高齢とはいえ波紋使いだし若いときにはこれよりもっと酷い修行を受けていたのは知つてゐるけど・・・！ それに100km位全力で走り続けられるとかつて何かで見た記憶があるけど・・・!! マスクをつけてるとはいえ体力的には全盛期といつてもいい私より息が切れてない・・・つてかほとんど汗すらかいてないって何!？

「そのマスクをつけてすでに30kmも走れるとは驚いたわい・・・もしかしてわしより才能があるんじやないかのう?」

「前世から波紋とかスタンドには憧れて少し練習してたからジョージ・ジョースターベルには使ってたと思うわ。おじいちゃんに修行をつけてもらつてるんだしおじいちゃんと同じかそれ以上に使えないとね? それに男女の力とか体力の差つて結構すごいし」

「だから波紋でその差を埋めようとしているんじやな?」

「そ
e x a c t l y!通
り!」

そうして波紋の修行を4時間程度して、晩御飯を作つて、その合間に花京院用の夕食（夜食?）を作つておいた。

午後の10時くらいになつたころ、花京院が起きていたので少し話をすることにした。

「・・・ここは？」

「起きたのね？ここは私の家よ。あなたの覚えている範囲で話してみて？」

「私は確か・・・夏休みに家族でエジプト旅行をして・・・金髪の男に出会つて恐怖を感じて・・・？駄目だ、これより後になにがあつたか思い出せない」

「何があつたか少しだけ教えてあげるわ」

「お願ひします。恥ずかしい話どうやつて日本に帰つてきたのかすらわからないのでね」

そして私は今まであつたこと、花京院の話に出た金髪^D₁の男について話した。

そして花京院の身に起きたこともある程度教えた。

「なるほど・・・つまり私は貴女に助けられたわけですか」

「まあ、端的にまとめるとそんな感じね。肉の芽は寄生主の脳なんかを餌にしているから半年くらいかしら？それくらい遅ければ私と会う前に死んでた可能性もあるわ」

「それは・・・運がよかつたわけですね。操られていた私があなたに会えたこと、そしてあなたが肉の芽というものを引き抜けるスタンドを持つていたことが」

「そうね、そのどちらかが欠けていたらあなたは死んでいた。それで？あなたはこれからどうしたいの？」

「……？どうしたい……とは？」

「あなたはこれから家に帰つて平和に生活することができるわ。スタンダード使いとスタンダード使いはひかれあう、という性質があるらしいからスタンダードを見ることができると出会うこともあるかも知れないわ」

「ふむ……私の『ハイエロファントグリーン』が見える人がほかにもいるのか……」

花京院は思案顔で俯いた。実際ジョジョの男性キャラは主人公側だとイケメンが多いんだよなあ……。こんな顔されると恋愛感情に関係なく不覚にも少しドキッとした。仕方ない事だと思う。ただし恋愛感情はない、大事なことだから2回言った。

「まあ、夜食作つておいたから持つてくるわ。それを食べて寝なさい。明日の朝にでもどうしたいかの答えを聞くから」

「わかりました。明日の朝には答えを出しておきます」

そう言つて私は花京院用に作つておいた冷えてもおいしい料理（前世知識）を花京院に持つて行つたあと自分の部屋で寝た。

ゴ

ゴ

ゴ

ゴ

ゴゴゴゴ

ゴ

ゴゴ

ゴゴ

ゴ

ゴ

ゴ

「・・・ツホリイさん!!大丈夫ですか！ホリイさん！・・・すごい熱だ、まさか!?」

「アヴドウルさん、ストップ」

「淨華さん・・・」

「人妻の肌を見るのは感心しないわ。それにこの状況は分かつていたことよ。こうなつてしまふことは分かつていたし、やらなきやいけないこともはつきりしているわ」

「DIOを倒す・・・じゃな」

「・・・これは一体?」

「ごめんなさい、花京院。起こしちやつたみたいね」

「いえ、それはいいのですが。なぜこの女性は倒れているのですか?」

「この人は私のお母さんよ。DIOの説明は昨日したでしょ?」

「ええ、確かあなたのお爺さんのおじいさんの体を乗っ取った吸血鬼で私を操った張本人だと」

「覚えていたのね。その私のおじいちゃんのおじいちゃん、ジョナサン・ジョースターの肉体を乗っ取ったというところが問題なのよ」

「・・・というと?」

花京院が怪訝そうに尋ねてきたので詳しく教えることにした。

「私たちジョースター家の肉体は何の因果かわからないけど精神的にはかもしけないわ。感覚的につながっているのよ」

「それとこの女性が倒れていることの関係性がまだわからないのですが・・・」

「つまりDIOがスタンドを発現してから私たちジョースターの人間も誘発的にスタ

ンドを発現したのよ。でも、スタンドは精神で操るもの、そして強い肉体がなければ使
いこなせないわ」

「つまりあなたの母の女性親は争いに向いてない性格の上に体も鍛えているわけではないため
に倒れたということですね？」

「そうよ、それでもDIOがスタンドを発現してから今まで倒れなかつたのは奇跡と
いつてもいいのよ。それだけ私たちに心配をかけたくなかったのね・・・」

「この状態をどうにかするためにはどうすれば？」

「DIOを倒す、殺すといつてもいいわ。DIOを倒さなければこの状態がずっと続い
て・・・完璧な医療で延命しても持つて50日くらいよ」

「ジョースターさん！すぐにでも出発するべきです！」

「ちよつと待てアヴドゥル。まずはSPW財団に連絡してホリイの様子を24時間体制
で見てもらうのが先じや」

「そうね、私たちがDIOを倒しに行くのだから看病する人は必要ね。・・・そういえば

昨日の続き」

「ええ、決心がつきました。私にもこの人の女性を救う手伝いをさせてください！これで贖罪
になるとは思っていませんが！それでも私は償わなければならぬのです！そして報
いなければならない！命を救つてくれた淨華さんに!!」

そうして花京院が付いてくることが決まり、SPW財団にも連絡が付き、財団の医療チームが来たところで私たち5人はDIOを倒すためにエジプトに向かう。まずは中国に行くために空港に行つた。原作通りの通り道に沿つていった方が想定外のハプニングに見舞われる可能性が小さく済むと思つたからだ。

第6・5話 仲間になつたスタンド使いたちについての 説明 + α

空条淨華

この作品の主人公兼ヒロイン。現在の作者の頭の中では仗助とか花京院とくつつけようかとか思つてる（一般人と結婚する可能性が一番高いと思われる）

現時点での登場人物たちへの（非恋愛感情の）好感度とどう思つて いるか
花京院→まあ、襲われるのは知つてたけど流石に少し怖かつたわ。対策を練つてたら問題なかつたし……。今後の活躍に期待する。頼りにしてるよ

好感度： ♥ ♥ ♥ ♡ ♡

ジジイ→中学生のころとか小さいころには心配かけてごめんね？でも一般人である私には戦いになれておく必要があつたの。信頼も信用もしてる。第3部で一番頼れる人物だと思う。好感度については原作で（ほかのキャラとの掛け合いなどが）好きなキャラだということも影響してると思う

好感度： ♥ ♥ ♥ ♡ ♡

アヴドウル→出番は少ない氣がするけどかなりの重要人物。・・・出番になるところ

奪つちゃってごめんなさい。（ライバル的存在でもあるシーザーを除くと）おじいちゃんのベストフレンドであるあなたのことを信用してる

好感度：♥♥♡♡♡

ポルナレフ：前世ではネタにされまくつてたけど正直第3部で一番かわいそうな人だと思う。正直、ホルホースも仲間にしたいし仲間にできたら仲良くしてほしいと思う。できれば第5部前にほぼ再起不能にされるのを防いであげたい。あと電柱（ボソツ

好感度：♥♥♥♡♡

スタンド：『プラチ奈』・『スター・プラチナ』

後者は原作通り、前者についてはうろジョジョから引っ張ってきたが能力についての説明はなかつたため独自設定

能力は『反転』と『解析』

反転は某ロリコンのベクトル操作（オート状態）と同じと考えてください。ただし反転できるのは例えばスタプラの時止め。これは私の解釈ですが光速で動くと時間の流れがゆつくりになるという原理がある（はず）つまりあれは某白い魔王のお父さんとかが使ってる体感時間を極限まで早めて？いるものだと推測しています。逆に『世界』の時止めは世界そのものに干渉してそのまま停止させているわけだから反転できません。

追加したうえコメントではできると言つっていたので申し訳ないです

スタプラと一緒に使うことで時間を巻き戻すことができる。ただし自分に使用する場合最大1分前まで。他人の場合は10秒が限界（死んでいる者の場合1秒程度）

解析については自分の体の異常を正確に知ることができ、多少なら無機物であれば材質や作（造）られたのが何年前かを知ることができる。解析したものを作るみたいなどつかのエミヤみみたいなことはできません。ちなみに解析できるものは人の手で作られたもののみ

同時に両方出すとスタンダードパワーが分散されるため、『戻す』能力を使うとき以外は同時出しをすることはほとんどない。（旅に出る直前で）具体的には

通常時 プラチ奈

パワー：（ギリギリ） B

スピード：B

射程距離：C (10~30m)

持続力：A

精密動作：S (岸部露伴のインクをペンから飛ばしてベタ塗りする事を見様見真似ができるくらい)

成長性 : C

2体出し時 プラチ奈

パワー : ギリギリCに届かないくらいのD

スピード : C

射程距離 : D (5~10m)

持続力 : C

精密動作 : (ギリギリ) A

成長性 : 変わらない

通常時 スタープラチナ

パワー : A

スピード : A

射程距離 : E (2m)

持続力 : A

精密動作 : A

成長性 : A

2体出し時 スタープラチナ

パワー：ギリギリB

スピード：B

持続力：C

射程距離：1m未満

精密動作：ギリギリB（Cに近い）

成長性：変わらない

こんな感じです。2体出しすると持続力が著しく低下します。ですので本当にやばい怪我をした時や誰かが死んだときのような治さなきやいけないとき以外は基本的に両方出すことはしません。ちなみに戻す能力を使う場合のステータスも公開

融合時

パワー：D

スピード：S

持続力：C

射程距離：D（ただし3～5m）

精密動作：A

成長性：B

花京院

淨華のことは少し気になつてゐる女の子くらい。自分を助けてくれたことのお礼をしたいということで行動を共にすることを決めたが本心は自分でもわかつていない
淨華→気になつてゐる女の子、困つていたら助けになりたいと思つてゐる。（つり橋効果もあるのか）自分の命を助けられて好意を持つてゐる。

ジジイ→淨華のおじいちゃん

アヴドゥル→よく知らないけど仲間であり、気が合いそうな人

ポルナレフ→変な髪型だが気が合いそうな人

ジジイ

ほぼ原作通り。違うのは孫の性別が違うことにより少し過保護氣味になつてゐること。淨華の事は信用している。アヴドゥルとは原作通りの仲

淨華→かわいい孫娘、無理や無茶をよくするからできるだけ戦いの内に怪我をさせないようしたい

花京院→淨華の口から襲われると聞いていたため警戒していた。淨華はそれを許容・信用しているので思うところはあるが信用している

アヴドウル→気が合う友人。ベストフレンド

ポルナレフ→ポルナレフ自身の口からも、淨華の口からも彼の過去を聞いており、復讐するために同行していることは許容している。彼が復讐を果たした後のことを考え少し心配している

アヴドウル

ほぼ原作通り、違う点を挙げるなら『スター・プラチナ』の命名をしていないことと旅に出る前にポルナレフに会っているため彼と原作より仲がいい

淨華→ジョースターさんのお嬢さん、闘い旅に参加すると聞いて止めようとしたが強い意志を感じ断念した。意志の強い女性というイメージ
花京院→敵として現れると聞いていたがその実血まみれになつた彼を淨華が背負つてきたことに驚愕。話をして、一応信用できる人物だと考へていて

ジジイ→DIOから逃げているところを助けてくれた恩人で気が合う友人。ベストフレンド

ポルナレフ→妹の復讐のために旅に同行していることは知っている。単独行動をとらないようにして欲しいと思っている

電柱ボルナレフの男

原作より復讐の闇に飲まれていない。復讐したい相手の情報を持つていてもかかわらず教えてくれない淨華に怒つてしまつたことは反省している

淨華→復讐したい相手の情報を唯一知つている女性。自分のことを心配してくれているのを知つていて、妹のように感じている

花京院→馬鹿を言い合える友人？

ジジイ→淨華の爺さん

アヴドウル→自分のことを心配してくれていることは知つているが少し過保護過ぎんだろう・・・

ホリイ

淨華の母。淨華が怪我をして帰ってきたときには全身の血がどこかに行つてしまつたんじやないかというほどの衝撃を受けた。それ以降は淨華が怪我をしているところを見たことがないので安心している

淨華→自慢の娘。自分のことを心配していることも知つている

ジジイ→自慢のパパ。強く、昔からいろいろなことに巻き込まれやすかつたが時には権力、時には金、ときには武力を持つて自分から危険を遠ざけてくれていたことを知つてゐる

第7話 タワーオブグレー

すでに飛行機に乗っているのかわからないが、待つてゐる人の中に『タワーオブグレー』クソジジイはいないと、ステープラチナで周囲の確認をして分かつた。

あの爺さんの演技を見るのも嫌だけど私たちが同じ飛行機に乗り込まなかつた場合追いかけてくるのかそれとも他の乗員を殺して金品を盗んで逃亡してDIOと関係ないところで悪事を続けるのかわからない。だからこそ同じ飛行機に乘つて倒すか乗つた後すぐに降りて釣りだすかするのが後々の憂いをなくすことにもつながると思う。

「淨華よお、本当に俺らと同じ飛行機に敵のスタンド使いが乗るつてーのか?」

「ええ、私の知つてゐる通りになれば、だけどね。そうなればDIOはタワーオブグレーのスタンド使いを当ててくるはずよ」

『タワーオブグレー』・・・飛行機を墜落させて死んだ乗客の金品を盗んでいく外道だつたな。死んだ乗客は皆一様に舌を抜かれていたと聞く

「普通の乗客の振りをして私たちの乗つてゐる飛行機に乗つてくるはずだから見つけたら私がみんなに教えるわ」

そう、いなかつた場合はどこで襲つてくるかわからなくなるがいた場合は幾重にも（花京院が『法王の緑ハイエロファントグリーン』で）罠を張つておいた方が安全だと思う。

・・・しかし罠を張つておいても奴の『タワーオブグレー』は私たちのスタンダードよりスピードがありすぎるからな・・・至近距離からの『ハイエロファントグリーン』のエメラルドスプラッシュユ躲していたし、何より『原作』承太郎の『スタープラチナ』のラッピュでさえ容易に躲していた。流石に中二病全開十普通に修行してたからスタープラチナ・THE WORLDも10秒くらいは使えるけど流石にこんな旅に出てすぐに敵に能力をばらされる可能性を高める必要もないと思う。ならばこそ可哀そうだけど機長と副機長には犠牲になつてもらうしかないだろう・・・。

おじいちゃんにもこのことは話している。難色を示されたし、できる限り原作に近づけるのと犠牲者を減らすことができる点ではこの作戦しかなかつた。あのジジイが後から乗り込んでくる場合と先に乗り込んでいる場合では話がさらに変わつてくるのだから。それに降りても追いかけてこない場合もある。DIOには金で雇われているだけ・・・みたいなこと言つてた気がするけど肉の芽を埋め込まれてる可能性もある。そんな不確定要素にかけて追いかけてこなかつた場合今後も犠牲者が出ることになるの

だから。

「おじいちゃん、DIOジョナサンの体は私たちとリンクしてゐるから近づいてるのは少なくともバレてる。それにジョナサンの体とDIOの頭で分かれて2つのスタンンドを持つてる可能性があるの。その場合『ハーミットパープル』みたいなスタンンドの可能性が高いわ」

「つまりDIOの討伐に動いてることは既にバレてゐる、そして不用意な行動はDIOに情報をくれてやることになるつてことじやな?」

「そういうことよ。でもDIOはおそらく私たち以外を念写することはできないわ。それにほぼ確実に使えなくなると思う」

「使えなくなる?スタンド能力がですか?」

おつと、敵に聞こえないくらいの声で質問してくれた花京院マジナイスだわ。一度使えるようになつたスタンド能力が使えなくなるなんて聞いたらおじいちゃんとかアヴドルだとオーバーリアクションに近い事になるかもしけないし。最悪なのは肉の芽を通してDIOがこちらの会話を知ることができるものだからね。つと、質問に答えな

きやね。

「ええ、私が知つてゐる通りになると断言はできないけど知つてゐる通りなら確実に使えなくなるわ。最終決戦では一切使つてなかつたもの」

「本当かア？一度使えるようになつたスタンダードが使えなくなるなんて聞いたことねーぜ？」

「さつき言つた通りハーミットペープルの念写と同じことは確実にできる、それ以上のことは知らないけどね。それでも途中から使つてゐる描写はなくなつたから使えなくなつたんだと思う」

そう、原作でDIOは念写に反応してジョセフに貴様……見てゐるなっ！と言つていた。つまりおじいちゃんの念写もほぼ確実にばれる。おじいちゃんにはいろんなもので念写の制御を上げてもらつて、現在は自分の体の中や一度訪れたことがある場所、果ては一度でもあつたことがある（すれ違つた人でもあつたと認識）ならある程度念写できるようになつた。写真で見たことがある、などの場合は念写できてもかなりピンボケするのだけどね。

「じゃあ、夜になつてから敵の攻撃が始まるはずだけど一応見張り役として1人は起きておくこと、その人以外はしつかり休息をとつておくこと。いいわね？」

『ああ』

「それと起きておくのは私にするわ。そうしておけば最悪の場合でも私単体で奴を倒せるから」

「ああ、しかし私だけなぜハイエロファンタントを出したまま寝ることを指示されたんだ？」「それについてはあとで教えるわ」

花京院は私のその答えに納得はいかないものの今聞き出すことは得策でないと感じ取つたからなのかそれ以上何も言つてこなかつた。

「ZZZ」

それから間もなくしておじいちゃんたちは寝始めた。しかしおじいちゃんだけは2

時間ほどで起きた。原作でもあつたDIOからの念写を受けたのだ。それに対して私とおじいちゃんの体が反応した。原作通り念写を受ければわかるようだ。ということはDIOにも奴に向けての念写はバレるのが確定した。

「感じたか淨華・・・！今確かに念写を受けたぞ・・・！」

「ええ、私は初めから知つてたけどこんな感じなのね。流石に感覚までは知らなかつたけど結構気持ち悪いものがあるわね。寝ている状態からいきなり立ち上がった時の立ちくらみにも似た感じだわ」

そんな私たちの話声が聞こえたのか花京院とアヴドウルが目を覚ました。電柱ポルナレフは爆睡しているけど。しかし『タワー・オブ・グレー』の攻撃は既に始まっているはず。その証拠に少し血の匂いがしているのだから。

『タワー・オブ・グレー』の攻撃が始まつたようです。ジョースターさん

「そのようじやな。戦いでよく嗅いでいたが・・・何の罪もないであろう一般人を我欲を満たすために殺し、金品を奪うなどと・・・」

「それにハイエロファントで確認しましたがコツクピットにいる機長と副機長が死んでいます」

『タワーオブグレー』はそういうスタンダード使いだからね。わかつていただけどこれ以上犠牲を出さないようにするにはこれくらいしか思いつかなかつた・・・！」

私は自分の考えが間違つていたなどとは思つてないが犠牲者を出さない方法があつたのではないかと少し後悔してしまつてゐる。こんな精神状態ではスタンダードでの戦闘どころか波紋すらまともに練れないだろう。そう思い軽く深呼吸することにした。

「淨華さんも落ち着いたようですしジョースターさん、これからどうしますか？」

「そうじやな、花京院。お前の張つた罠に『タワーオブグレー』はかかつていなかつたのか？」

「ええ、わかりやすい罠と分かりにくいやつを仕掛けていますがどちらにも引っかかつた様子はありません。本体をたたくのが一番早いと思います」

「本体かどうかの確認をするために一応奴の目の前にハイエロファントを出しておいてちようだい」

「わかりました、ついでに話しかけておきますね。反応があればすぐに攻撃しますがいいですね？」

そう言つて花京院が『ハイエロファンタグリーン』を敵の本体の前に出してスタンドを介した会話を始めた。

内用は大体こんな感じだつた。「タワー・オブ・グレー、卑劣なスタンド使いよ。お前がどのように思い人を殺してきていたのかは知らないがそれも今日が終わりだ、海の底で永遠に懲悔し続けるがいい」

それに反応したジジイは『タワー・オブ・グレー』を出して花京院に先制攻撃しようとしたが花京院の張つていた罠に捕まりあえなく引きちぎられて苦しみ悶えながら死んでいった。まあ、本体にダイレクトアタックすればスタンドなんて相手にしなくても問題ないんだけどね。そしてここでようやく飛行機が傾き始めたことに気付いたのかポルナレフが起きた。

「なんだア？ 飛行機が傾いてねえか？」

「はあ・・・ポルナレフ、敵は倒しましたよ」

「どういふか今まで本当に寝ていたのか？ お前は」

「大物というべきか馬鹿というべきか・・・」

「なんだよオ！ 戦闘を行うんなら起こしてくれりやあよかつたじやねえか！」

「まあ、ポルナレフらしいちやらしいからね～」

そんなことを言いつつも私とおじいちゃんはコックピットに向かっている。機体が傾いているということはあのジジイが機長と副機長を殺している、つまりこのままでこの飛行機は墜落する。

墜落するということは知っていたから偶におじいちゃんに頼んで飛行機の操縦の仕方を退役した空軍の人やSPW財団で操縦できる人に教えてもらっていた。そのおかげである程度安全に着地させることができるようになっている。

「お、お客様!? この先はコックピットになっています！ 機長と副機長以外の立ち入りは

禁止されています!! 席にお戻りください!」

「機体が傾いているのよ、機長と副機長が乱心しているか死んでいるかのどちらかなのはほぼ確定なの。このままじや乗員や旅行者まで巻き添えになっちゃうのよ。幸い私もおじいちゃんも飛行機の操縦経験はあるわ。だから通してくれないかしら?」

そう言つて私とおじいちゃんはコツクピットに乗り込み、機長と副機長が死んでいることを手早く確認した。そして死体を丁寧にどけてから操縦席に座つた。おじいちゃんが機長席、私は副機長席だつた。私たちは協力して香港沖、約10km程の所に不時着させた。

(原作では) 香港で戦うことになるポルナレフをすでに仲間に引き込んでいるから1日～2日ほど休息をとり、SPW財団に話した上で船を用意してもらうことにした。ここでアンとテニールの相手をすることになる。アンについては密航をしようとしてただけだから諭して財団に任せればいいとしてテニールはわざわざ船で海の上に出てから戦つてやる必要はない。渡航計画を話し、聞くという名目で私たち全員とテニール1人だけで会談を近くに水辺のないところでする。その時に話すのは私と花京院だ。一応英語とフランス語ができる人にしてほしいと頼んでいるから來るのは日本語は一切で

きない人間になつてゐる。そのことを伏せたまま私と花京院がスタンドを介して日本語で話せばすぐにぼろが出る。それはそうと1日は時間があるから少し観光でもしようかな。中国語も財団員に多少習つてるし・・・。

第8話 ダークブルームーン

そして私たちは近くに水辺（海や湖、大きな池なんか）のないホテルを借りて財団の手配した船とそこに乗り込んでくる偽船長のテニールを倒すためにテニールと会合を行っている。もちろん、罠に嵌めるため私と花京院でだ。

「それで船長さん、どんなルートを通るのかしら？できるだけ早くエジプトへ行つてDIOを倒したいのだけれど』

『そうですなア・・・どんなに早くても10日はかかりますな。途中で燃料や食料を買ふことも念頭に入れて15日がめどといったところですかな』

『それじゃあ遅いんですよ。もう少し何とかなりませんか？』

『ならないですな。これ以上早く行こうとするなら飛行機やセスナ、自家用ジェットなんかで行つた方が何倍も速いです。ですが船の方がいいのでしょうか？』

『そうじやな、船ならば被害も最小限にできるはずじやしのう』

そう、今私と花京院はスタンドを介して話してはいるが話している言語は日本語である。日本語のできない財団員を希望したし私もそのことは念入りに確認している。

そのためこの時点で目の前の男が偽物であり、スタンド使いであるとわかつている。

『『ところで船長さん?』』

『『なんですかな?お嬢さん』』

『私と彼は今日日本語で、しかもスタンドを介して話しています。なぜ日本語のできないはずのあなたが私たちの言っていることがわかつてているのかお答えいただけますか? スタンドを介して会話を自動翻訳されるのは相手がスタンド使いだつた場合だけなのよ』』

私がそう言うとテニールはひどく狼狽しながら口を開閉した。彼の感情は驚愕、怒り、怯えが見ているだけでわかる。まず驚愕、自分が船長に化けているとバレていた上に罠にはめられたからだろう。次に怒り、嵌められたことに対する私たちへの怒りと奴自身への怒りだと思う。怯え、恐怖と言い換えてもいいと思う。これは袋叩きに合う事を考えてだろう。『ダークブルームーン』は水中では無類と言つても差し支えない強さ

を誇るが陸上では中の下といったところだろう。水中での強さは原作で本人が言つてた通り承太郎達5人を一気に相手にしても問題ないのだろう。

『あら？ 何を怯えてるのかしら？ もしかして袋叩きに合うこと？ 安心なさいな。あなたのお相手は私だけよ』

『なんだとオ・・・？ 水中でなければ本領が発揮できないがいいのかア？』

『ええ、私の対人戦闘経験がなきすぎるから1対1でなおかつ弱点を突いてるのよ』

「（ククツ・・・このアマア、俺のスタンダードの恐ろしさを分かつていなーいなあ・・・！ 水中では無敵だが陸上ではそこまでいかないというだけだ！ 陸上で能力が使えないと思つていいのだろう！ 陸上でも敵の力を吸い取る能力は使えるんだよ!!）」

『どうするのかしら？ 私とのタイマンを受けるのと全員に袋叩きにされるの。どちらがお好みかしら？』

『いいだろう、お前との一騎打ちを受けてやる！』

テニールとタイマンで戦うのには実は対人経験の蓄積以外にも理由がある。私は前世でけんかなどしたことはなかった。それに現世でもほとんど喧嘩と言うほどの喧嘩

はしていない、ナンパされていやがつて子を助けていたくらいだ。その時に喧嘩に近いことにはなっていた、それくらいのものだ。というよりはスタンド使い同士の戦いなどはほぼ皆無と言つてもいい。そんなじょうたいでDIOと戦う？ 無駄死にしてクルセイダース^時が全滅するだけだ。いくら私が展開を知つていてなおかつスター^止・T H E W O R L D^めも現時点ですでに3秒ほど使えるとはいえどれくらい成長するかなんてわからない。『プラチナ』がいるから原作で普ツツン時5秒になつていたのが私の場合3秒のままの可能性だつてある。それにホリイさんを助けたいとは思うが敵を再起不能にしたり殺したりという覚悟はできていない。

「だからなんだろうなあ・・・」

「どうしました？」

「何でもないわ。敵の行動とかを知つていても自分の覚悟がついてきてなければ意味がない気がしてきたなんて言えるわけないじやない（ボソッ）

私が何を考えてるかばれてるわけではないだろうけどおじいちゃんには悩んでるこ^トがばれてそうね・・・。

『ジョセフ・ジョースター』は人の思考を読むのが得意だしね。

「『ここ』でいいだろう』

「『ええ、そうね。ここでいいわ』

その言葉をきっかけに会議場所から1時間ほど移動した近くに水辺のない鉱山の跡地で戦闘を始めた。おじいちゃんたちに言っているが私が殺されてもやつが逃げるようなら追わなくていい。そしてテニールには私を殺した後で逃げるのならおじいちゃんたちが追いかけないという確約を飲ませている。

「ツ！・・・やつぱり実践と訓練では全然違うわね・・・！」

『どうしたア！これで終わりかア!? だつたらとんだ拍子抜けだなア!!』

『言つてくれるわね。余裕のつもりかしら？ 余裕をかましてるのはわかってるけどね。あんたは一切スタンド『能力』を使つてないもの』

スタンドでの戦闘を行つてゐる。それなのに私がスタンド能力を使つていないと

いつたことに頭のいい花京院やおじいちゃんは少し考えてから理解したような顔をした。だがそこまで頭がよくないらしいポルナレフと割と感覚でスタンンドを使役していらっしゃいアヴドゥルは疑問を抱いているようだ。そしてテニールと言えば

「ツ?！」

と、声には出していないが自分のスタンンドの能力をどの程度知られているのか恐怖を抱いているのか少し青ざめている。まるでＴＶで花京院やアヴドゥルがDIOのカリスマに当てられた時のようなになっている。正確にすべての能力を知られていたら勝率が限りなく0であると考えているのだと思う。

「そうよねえ？ だつて相手にフジツボをつけて力を吸い取る能力も、うろこを飛ばして敵に攻撃する能力も使つてないんだもの！」

『・・・どこだ！ どこで俺のスタンンド能力について知った！ 一体どうやつて!!』

『答えると思うかしら？ どこで、どうやつて知つたことであろうと私があなたのスタンド能力を知つてることに変わりはないのに』

私がそう言つたと同時に完全に戦意喪失して自棄になり単調な攻撃しかしてこなくなつたから再起不能にして病院送りにした。恐らくやつは私に対して恐怖を抱いていたと思う。自分しか知らないはずのスタンド能力、それを知つてゐる私。
：うん、普通に怖いよねえ。そして私の懸念はあまり氣にするほどのことではなかつたのかもしれない。テニールを重症ボコボコにしたというのにあまりそのことに対する恐怖とかの負の感情がわからない。・・・たぶん元々の承太郎の黄金の精神がこの体に詰まつてゐるからだと思う。

第9話 ストレングス（1）

ダークブルームーンを倒した日から2日目の朝、私たちはホテルを出てスピードワゴン財団に用意してもらつたこの時代で一番性能の高い高速船を用意してもらつた。

フォーエバーを倒さないという原作改変をしてしまうと紅海にて「ハイブリエース」との戦いに乱入される恐れがある。そうなつてしまふと連携を取れるかどうかを別として相性のいい能力2つを相手にする必要が出てくる。なので相性のいいスタンドを後に回されないように確実に倒しておくようにした。

「花京院にもあの日の事はバレてないみたいだし大丈夫かな・・・」

「なんだ淨華ア、考え方か？」

「ええ、今日戦うことになるスタンド使いと後で出てくるスタンド使いの事を考えてたのよ」

「それでどんな敵なんだ？淨華」

「これから海に出て戦うスタンドは『ストレングス』スタンド使いは確かチンパンジーだつたかしら」

「チンパンジーだア!? ははは！こりやあ傑作だなア！」

「・・・ 言つておくけど私の知つてゐる元のこの世界では全滅しかけてたわよ」

「元のこの世界・・・？」

「ああ、アヴドゥル。気にしなくていいわ」

「そ、そうか」

そんな会話をしながら船の前についた。フェリ―のようなものだつた。おじいちゃんと（念のため）花京院に乗り方を習つてもらつてゐる。何の罪もない財団のバックアップチームに死んでほしくなかつたからだ。原作改変になるとは思うがこの程度なら誤差の範囲だろう。アンちゃんがいなかつたらそのまま出航、いれば財団に連絡して少しの間預かってもらつておくようにする。すでにいた場合は連絡をして預かつてもらうことの了承を取つてゐるから問題ない。

「さて、いるのかいないのか・・・」

「おおゝい淨華ア！お前が言つてたやついたぞオ!!」

「そう、探してくれてありがとね。ポルナレフ」

「放しやがれえ！放せつてんだ！この電柱野郎！！」

「ブフウ!!!」

おおう・・・電柱発言は中国での物がなかつた分ここに回つてくるのか www
私も来ると思つてなかつた電柱発言に不意を突かれて大爆笑してしまつた。おじい
ちゃんたちは言うまでもない。原作以上に笑つてゐる。まあ、言われたポルナレフは怒
り心頭つて感じだけど。海に放り投げようとしたから流石に（無駄遣いかもしれないけ
ど）スター・プラチナ・ザWORLDを使って抱き寄せてから時を進ませ始めた。

「ポルナレフ、後でお仕置きね？」

「ハア？ なんでだよオ！？」

「自分より10くらいい年下の、それも女の子を海に放り投げようとしたからよ」

「淨華さん、その子は・・・女の子なんですか？」

「ええ、間違いないわ」

そう、抱き寄せた際に結構柔らかい感触があった。特に胸のあたりに。それだけでなく体全体が柔らかかった。女子特有の柔らかさってやつだと思う。自分が女だしそもそも男と触れ合う機会なんてほとんどなかつたからあんまり違ひはわかんないけど。

「いつたい何話してやがんだ!! あたしはシンガポールへクソ親父に会いに行くんだ! 邪魔すんなら誰であろうと容赦しねえぞ!!」

「とりあえずこの子はスタンド使いじゃないから安心していいわ。おじいちゃん、ちょっと波紋で通訳してもらえる?」

「お、おう。少し痛いが我慢するんじやぞ」

『私の言つてることがわかるかしら』

「おおう?! いきなり何言つてるかわかるようになつたぞ?! 何をしたんだ?」

『とりあえず私たちは急いでる。それに少し危険な旅になる。あなたのその年で死にたくはないでしよう? 死にたいというのなら私が今ここで殺してもいいし船で沖まで行つて海に捨てるつてこともできるわ』

私がそういうとポルナレフたちがギョツ?!とした顔になる。特にポルナレフは驚き

が強い。中学生の時に命を捨てるようなことは許さないと（私が）言つていたからだろう。アンちゃんは「死んでも」とか「できるもんならやつてみろ！」なんていうと即座に私がそれをするだろうという言いようのない恐怖や淵みを感じているようで顔色がどんどん悪くなっている。

「そ……それじゃあどうやつてあのクソ親父に会いに行けばいいってんだよお……！」
「命を軽々捨てるようなことはしない。そう誓えるのなら私が何とかするわ。私の知り合いにその人を探すことを手伝つてもうこともできるもの」

「ほ、本当か!?」

『ええ、嘘ではないと誓うわ。あなたもそれでいい?』

「ああ、ありがとよ！そ、その……お姉ちゃん／＼＼＼

アンちゃんがデレた!?これは素直にうれしいわ。なんか恋愛対象としてじやなさそうだし……お姉ちゃんつて……お姉ちゃんつて……前世で弟が小さかつた時の事思い出すし……うわあ、超うれしい。……現世では1人っ子だつていうのもあるんだけどね。

「フフツ、いいのよ。」取りあえず財団の皆さん、言つていた通りにお願いしますね？普通の女の子なので変なことは絶対にないこと。できる限り女性職員をそばにつけること

「わかっています。年頃の女の子を大人だらけのところに置いておくことになるからですよね」

私はアンちゃんを少し撫でてから財団の職員についていくように言つた。アンちゃんは残念そうな、物足りなさそうな顔をしていたがすぐ笑顔になつて手を振りながら財団の職員さんについていった。

「じゃあ、いろいろあつたけど行きましょうか」

「そうじやな」

その会話だけで私たちは素早く船の点検、動作確認をしてシンガポールに向かつて船を進め始めた。（操縦しているのは花京院だ）

出向してから3時間ほどたつたようで太陽がほぼ真上に来ていた。お昼時だ。寝ていた私に遠慮していたのか起こさないでいてくれたようだ。申し訳ないことをした…花京院は知らないが他の3人はあまり料理とかできないようだつたのに。そう思つた私は起きてすぐにアヴドゥルたちに挨拶をして調理場に引つ込んだ。船の上で揺れる上に狭いため私一人での作業だ。そもそもこの中（クルセイダース）で一番料理ができるのが私のためホテルとかでない限りは私が用意している。次の展開を知つてゐるため保存食を多めに積んでもらつてゐるが、おそらく今日襲撃が起つる。なので全員に保存食を持つておくように伝えてゐる。船が壊れてもできる限り保存食を持つていける

ようにおじいちゃんや花京院に頼んである。それにゴムボートも積んでいる。万全の状態で敵の土俵に入っている。さすがにそんなことをあのチンパンジーは知らないだろう。そんなことを考えつつ私はお昼ご飯の支度を終わらせた。

「お昼ご飯できたよ!!」

「待つてましたア!!」

「いつもありがとうございます」

「ありがたい」

「淨華の飯はうまいんじやよなア」

上から電柱、花京院、照れますなあ、おじいちゃん。
ボルナレフ
ア ドウ ル
セ ヨ

食器に一切使われた様子がなかつたから予想はしていたが誰も何も作らず食べずの状態だつたらしい。

「ハーア、慌てなくていいよ。大の大人3人に食べ盛りの男子高校生1人いるわけだから多めに作つて食料は保存食以外全部使つたからどんどんおかわりしてねー！」

私のこのセリフには誰も反応しなかつた。保存食が7日分ほどあり最悪の場合でも食料や水に余裕があるからだろう。そもそも敵の襲撃があることを前日に伝えていたからだろう。大量の食糧、特に生ものを積んでいても大半が無駄になるからだ。そしてお昼ご飯を食べ終わつてすぐに再び船を進め始めた。

そしてまた3時間ほどたつたころだろうか、強い衝撃があつたと思つたら船内に打ち付けられかけた。というのも打ち付けられる直前で『プラチ奈』が抱えてくれたため打ち付けられなかつただけだが。襲撃が来たのだろう。そう思いながら甲板に出ておじいちゃんたちの乗つているゴムボートに乗り込んだ。そのすぐ後にフォーエバーの乗つているであろう巨大客船になつているボロ船が見え、それに乗り込んだ。

第10話 ストレングス（2）

「それじゃあ、オランウータン？討伐を開始するわよ」
 「それで俺たちはどうしたらいいんだ？」

「ある程度時間がたつたら私がおびき寄せるわ。さすがに少し危険だし私以外は2人1組で移動すること。これだけは絶対に守ってね？」

「ええ、わかりました。ですがどうやつて敵のスタンド使いをおびき寄せるんです？」
 「・・・花京院、世の中には知らないほうがいいこともあるのよ？」

「ツ！す、すみませんでした。配慮が足りませんでしたね」

私が不機嫌になつたことからどうやつておびき寄せるのか大体察しがついたようだ。
 流石におじいちゃんなら（家族だから）まだしもほかの人にそこまでサービスしてやるつもりは一切ない。まあ、おじいちゃんは（知らな方とはいえ）自分の母親のお風呂を必死にのぞいてたし微妙だけど。

・・・おじいちゃんと花京院、アヴドゥルは察しているのにポルナレフだけは察しがついていないようで花京院に聞いているが花京院は突っぱねている。

「じゃあとりあえずある程度探索しておきましょうか。絶対に甲板に行かないこと、いいわね？」

「ああ、わかつた」

・・・あつ。よく考えたらこの船全体があいつのテリトリーなんだから先に伝えておくべきだったわね。もしかしたら盗聴器か電話みたいなものとか仕掛けられてて既に自分の配下の情報が漏れていますとバレてるかもしれないわね。

「はあ・・・よく考えたらなんでこの船って、スタンド能力で作られてるようなもんのにお湯とか出るんだろう？便利だなあ」

うん、正直思うよね。なんでボロ船がスタンド能力で作り替えられた？だけでなんでも過された状態でお湯が出るようになるのかってさ。まあ、正直また濡れるからあんま

た。スタンド使いとはい、女である私には生物的にも、スタンド的にも抗う力がないと思つていたのだろう。

「私は油断も慢心もしないわ。自分のテリトリー内に敵が入つたうえ、メスが単独行動したからと言つて慢心している、アンタみたいにはね」

「ウヒヒイーーヒイーヒイウホホウホウホホ!!」

ブチブチイツ!!

あ、あら？ 1発入れただけで降伏する？ 全力のパンチが決まつたとはい、スタンド使いはその程度では死なないし、骨にひびが入つたとしても敵対している者に憎悪なんかを向けるはずなんだけど・・・まあ、自分では確実に勝てないと思つたら逃げを選ぶ人もいるし、隠れてやり過ごす人もいる。仲間を集めて復讐するなんてのも選択の1つだ。

ズブズブ・・・ガキン！ シュルシュル

「はあ・・・やつぱりこうなるのね」

「ウホホ!! ウホー！ ウホー！」

やつぱりアニメの承太郎が壁に磔にされた時みたいになるのね・・・。正直あの時は承太郎だったから無事だつたのだと思う。磔にされてしまったのは私だ、女なのだ。波紋の呼吸をして身体能力の強化をしても全然足りない。波紋自体は使えなかつただろうが、承太郎の力で抜け出せなかつたのだ。それにスタンダードの暗示がストレングス力なのだ。力ずくで抜け出すことは不可能に近いだろう。圧倒的絶体絶命だ。確かスタンドを出し入れできなかつたはずだ。捕まつた後の話ではあるのだが。

「私を捕まえて何をするつもりかしら？・まあ、わかってるけどね」

今、奴の思考は工口でいっぱいだろう。正直私の胸や下腹部の辺りに視線が集まつてゐる。これほどわかりやすい視線だと怒る氣すら失せるというものだ。私につかみかかろうとはせず、むしろ私を厳重に拘束し始める。スター・プラチナだけでなく私自身の力も悔れないと考えているのかもしれない。スター・プラチナを出すタイミングを間違えると私は死ぬ可能性がある。それに甲板にいなはずだとはいえ、花京院や、おじいちゃんたちが確実に助けに来れるとは言えない。とはいへ、捕まつていなければ、も

しくはハイエロファントグリーンなら、この状況をどうにかできるだろう。

「一か八か・・・！」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ!!!
ドゴドゴドゴドゴオツ!!!』

「ウホ！ウホホｗｗｗウホーウホホー!!」

原作の様に辞書?を見せてきた!そこには、ストレングス、力、タロツトカードの8番目のカード、そう説明がされている。正直バカにしているようにも感じる。それもそうだろう、空振りした拳旬床を思いつきり殴っていたのだから。さらにスタープラチナも捕まり、出し入れができなくなつた。大ピンチなんてものではない。でもなんでこれつて出し入れできなくなるんだろう?敵のスタンンドに捕まっているからなのだろうか?

「これから私を犯すつもりかしら?できるものならやつてみなさい?愚かな慢心したオランウータン」

そう、私がよけられたにもかかわらずスター・プラチナで地面を攻撃し続けた理由はただ1つだ。

『赤いレツド・荒縄バインド!!』

「エメラルドスプラッシュュ！」

『オラアツ!!』

『大丈夫じやつたか!? 浄華ア!』

酷いリンチを見た、おじいちゃんは攻撃に参加せず私の方に来たけど。アヴドゥルが炎で捕まえて、花京院がそこにメロンの種スプラッシュュを打ちこみ、ポルナレフがバインドの炎を巻き込みながら切りかかっていた。そのせいでフォーエバーの体毛はほとんど燃え尽きていた。スタンド使いじやなかつたらすでに死んでいただろう。正直、少し可哀そうだなと思う。ただ、おじいちゃんに返事しておかないとどうなるかわからんないからちゃんと言つておかなくちやね。

『大丈夫よ、捕まつてただけで癌にもなつてないし。攻撃も特に受けてないから』

『そうか・・・ならいいんじやが』

『あ、そういえばそろそろのはずね』

『何がだア？』

ポルナレフが聞き返してきたと同時に船が大きく揺れた。おそらくフォーエバーが息絶えたのだろう。そのせいできつくりとだが、船が崩れていく。元のボロ船に戻っているのだろう。

『このために用意していたのか』

『ええ、これを知つてたから先に準備していたのよ。できる限り濡れたくなかつたからね』

「未来を知つているというのは伊達じやないですね」

「そうでしよう？」

フォーエバーは倒せたのだが、最悪の場合D.I.O.達に私の情報が伝わっている可能性も考えなければならぬと思う。